
英雄の後始末

吉田 匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の後始末

【Nコード】

N7713W

【作者名】

吉田 匠

【あらすじ】

祖父の蔵で見つけた黒い本の中の魔法陣を興味本位で描いてしま
い異世界にやって来た誠治。

本当なら無双するほどの強さなのに何故か気苦労が絶えず……

1話 黒い本

8月も中旬を過ぎたが未だ暑さが緩まない日々。
が、此処はある山中にある道場。

早朝の為か暑いどころか肌寒い。

道場内は張り詰めた空気の中、青年が座禅を組み老人がその背後に
佇んでいる。

「……………」

「喝!!」

バキヤツ!!

「ぐおわぁー!!」

老人の手刀が青年の脳天に直撃し余りの激痛に転げ回る。

「邪念が出とるぞ」

「出るに決まってるだろ!!」

青年は涙目になりながらも老人に怒鳴りつける。

「休みのたびに人をこんな山奥まで連れて来やがって!! 本当なら
今頃京子ちゃんや香ちゃんの水着姿を拝みながらキヤツキヤツウフ
フしてたんだぞ!!」

血の涙を流さんばかりの叫びである。因みに京子、香は大学内でも
トップクラスの人気を誇る。

「ほっほっほっ。何も出来んへタレの癖にのう」
しかしそんな青年の叫びなど全く気にも止めない老人はカラカラと笑う。

「ぶっ殺す」

プチッとどこかの線が切れたのを自覚した青年が老人に襲い掛かる。

「遅いのう」

凄まじい速度で迫る青年だったが老人はあっさりと交わし右手首を掴むと床へ叩きつける。

「げはっ！！」

受け身をとる事も出来ず身動き一つとれない。

「全く…感情に支配されてはいかんと散々言っただじゃろっ？」

「う…るせえ……糞爺い……」

「ほっほっほっ、減らず口が叩けるなら大丈夫じゃの。ほれ飯にするぞ」

「ちくしょー……」

青年の名は山上ヤマガミ 誠治セイジ。

都内の大学に通う21歳。

何故誠治が此処に居て何をしているのか説明しようと思う。

此処は誠治の祖父であり先程誠治を叩き伏せた老人、山上ヤマガミ 清十郎セイジユウロウ
の住居兼道場である。

休みになると清十郎は誠治を鍛えていた。

とは言っても誠治は好き好んで今の現状に居る分けではなかった。

最初は10歳の頃。

その頃はそれ程まだ抵抗もなく此処へ来ていた。言わば遊びの延長。

しかし年を重ねていくと誠治は嫌がった。それは無理もなく当初の頃はまだ軽い鍛錬内容だったのだが、誠治の身体の成長と共に厳しいものとなっていた。

朝から晩まで走らされたり熊とタイマンさせられたり……………

そうなるとう然誠治は嫌になり逃げようとするのだがタダの一度も逃げ切れなかった。

今回は特に誠治は捕まる分けにはいかなかった。

奇跡的に京子ちゃんと香ちゃん二人と旅行に行く約束を取り付け（後一人男が一緒）れたのだ。

念密に清十郎から逃れる計画を建て全てが順調だった。

しかし浮かれ気分ですべての待ち合わせ場所に向かった誠治を待っていたのは満面の笑顔の清十郎。

逃げる誠治追う清十郎。

抵抗する誠治拘束する清十郎。 哀れ誠治のパラダイスは無になった。

誠治は決して弱くない。

180はある身長に引き締まった身体。

大抵のスポーツや格闘技をこなす運動神経。

ただ相手が悪いのだ。
齢70になるが誠治は清十郎が息を切らしているのを見たことがない。
何度も組み手をしているが勝つどころかまともに攻撃が当たった事すらない。
噂だが一人でヤクザの組を壊滅したどころか外国の軍隊をも全滅したなんてのも。

ではそんな清十郎がどうして誠治を鍛えているのか？
そう問われた清十郎はただ一言、「いずれ分かる」とだけしか言わなかった。

「何が悲しくて俺は……………」

時刻は昼過ぎ。

珍しく出掛ける清十郎は誠治に蔵の掃除を言い渡した。
蔵の中は統一感のない物が所狭しと置かれている。

色彩豊かな民族衣装に妙なお面。西洋鎧があるかと思えば見たことの無い動物の剥製等々……………

清十郎は若い頃世界各国放浪の旅をしていたらしく消息不明になる事は日常茶飯事だった。

「たくつ、爺いなら爺いらしく掛け軸とかにしとけよ」
ぶつくさ文句を言う誠治だが手際よく掃除をしていく。

清十朗が居ないのだから逃げれば良いと思うだろうが、そんな事をすれば後に地獄がまっている。
ヘタレと言う無かれ、誰しも死にたくないのだ。

「お兄様!!」

「ん？飛鳥か。何だまた来たのか」
誠治に声を掛けたのは山上 飛鳥。
中学3年の15歳で誠治の妹だ。

「やっと夏期講習が終わりました、これからお兄様と一緒に居れます!!」

「お前も物好きだなあ」
飛鳥は誠治が此処へ連れて来られる度に後から着いてくる。

「物好きではありません!!私はお兄様と一緒に居たいんです!!」

「しかしなあ、此処にいたら折角の夏休みが満喫できないぞ?海と
か行きたいだろ」

「そう言うと思いますよ……………」
飛鳥は着ていたパーカーを脱ぎ捨てる。
そこにはビキニ姿の飛鳥。

「ぶっ!!」

「どうです?似合いますか?」

「似合う！！似合うから着ろ！！」落ちていたパーカーを拾い上げ投げる。

「もつと見て欲しいんですけど」

「頼むから着てくれ！！」

誠治の必死な懇願に渋々パーカーを着る飛鳥。それにホツとする誠治。

飛鳥は美少女と言っても差し支えない容姿をしている。

街中では数え切れない程スカウトされている。

しかも15とは思えないスタイル。そこらのグラビアアイドルも裸足で逃げ出す程。

毎日クタクタになるま鍛錬をさせられている為性欲を発散出来ない誠治には目の毒だ。

しかも最近の飛鳥はやたらと誠治にスキンシップをしてくる。

いくら美少女とは言え妹。

まさに誠治にしてみれば別の鍛錬と言える。

「お兄様、これ何でしょう？」

二人で蔵の掃除を再開して暫く飛鳥が一冊の本を見つけた。

大きさは縦50センチ横30センチ厚さ5センチ。黒い革のような物で表装されているがタイトルも何も書かれていない。

「初めて見るな……」

十年近く前からこの蔵に出入りしている誠治だが初めて見る物だっ

た。

開いてみるが本の中は白紙だった。しかしパラパラ捲っていると1ページだけ何やら書いてある。

「異世界の行き方？」

そこには円形の図面が描かれており、図面の描き方や使う塗料等が事細かに書かれている。

「お爺様が書いたんでしょうか？」

「多分違つたら」

「ですよ」と飛鳥は首を傾げる。

清十郎がコレを書くのが想像出来ない。なら何故こんな物が此処にあるのか？

「まあいいか、サツサと終わらせよう」

「そうですねお兄様」

取り敢えず掃除を再開した二人。

しかし誠治は何故かその本が気になっていた。

夜。

飛鳥は泊まる事になり一緒に夕飯を取った。

飛鳥の料理の腕はかなりのもの。

清十郎と誠治はあまり料理が得意ではないので非常に満足した。

その後は誠治が入浴中飛鳥が間違つて？浴室に入ってくるハプニングはあつたものの何事もなく終わる。

二人それぞれ部屋に戻り後は寝るだけなのだが……

「何やってんだろな俺」誠治は自分の部屋の光景を見てポツリと咳いた。

部屋自体は6畳程でベットと机があるだけの殺風景なもの。

しかしフローリングの床には黄色のペンキで円形の図が描かれている。

ベットを縦に退かしあり直径約2メートルの円には文字らしきものが隙間なく書かれてある。

そうこれは昼間蔵で見つけた黒い本に描いてあつた図だった。

本は蔵に置いてきた誠治だったが何故か気になり夕飯後取りに戻つたのだ。

そしていつの間にか一心不乱に図を床に描いていた。

「2時か……」

携帯で時刻を確認した誠治は円の中心に座り暫し空を眺める。

（何でこんなもん書いたんだ俺は？）

誠治はアニメも漫画も見るがそれほど夢中に見てる分けではない。

だから異世界と言われても正直ピンとこない。

明日は早朝から修練なので早く寝るべきなのだ。なのにこの図を描かずにはいられなかった。

しかも描き終わったのに何も起こる様子がない。

「寝るか……」

言いようもない疲労感にグッタリしながら立ち上がる。

すると描いた図が淡い光を発し出す。段々光は強くなり誠治の目の前が真っ白になる。

「ちよ！？タンマー！！」

その頃飛鳥は気配を消しながら兄である誠治の部屋を目指していた。

ピンクのネグリジエを着ているのだが薄く透けていて白い上下の下着が見える。

今日飛鳥はある決意を胸に此処へ来ていた。それは兄、誠治に愛の告白をする事。

兄妹の愛は禁忌、^{タブー}許されるものではない。

しかし飛鳥に躊躇いはなかった。

幼少の頃から憧れだった誠治。何時しかそれは好意になり愛情になった。

とは言えその相手が兄である以上世間から祝福されるものではない。

なのだが先日15歳の誕生日を迎えた飛鳥は両親からある事実を聞く。

それは両親同士が再婚であり誠治と飛鳥は連れ子なのだ。

つまり誠治と飛鳥は血の繋がった兄妹ではなかった。

飛鳥はその場で号泣した。

両親はシヨックの為だと思ったが実はそうではなく歓喜の涙だった。叶わないと諦めていた想い、それが諦めなくて良いと解った飛鳥は

今日身も心も誠治に捧げる決意をした。
本当なら偶然を装って誠治の入浴中に乱入し最後まで事を成す予定
だったが逃げられたのだ。

「お兄様今度は逃がしませんよ」

子兔を狙う狼のような雰囲気を出しながら誠治の部屋のドアノブを
握り一気に開ける。

「お兄様愛しています！！どうか私を抱いて下さい……………」

しかし其処には誠治は居らず床に妙な図が描かれているだけだった。

「お兄様何処へ……………」

それから一晩中誠治を探す飛鳥だったが一向に見つからなかった。

2話 いきなり見捨てられる

「マジか……………」

誠治は啞然としながら呟いた。

自分の部屋に描いた図が光り出し眩しさに目を瞑り暫くして開けると其処は森だった。

見上げる程高い木々に日光は遮られ辺りは薄暗く足元は積もった落ち葉で柔らかい。

「まずは……………落ち着こう」

一回二回と深呼吸。

「よし、現状確認といくか」

まず辺りを見渡す。

森なのは解るが道場の近くではない。

自分の服装はTシャツに短パン、サンダル。ポケットにはマジックペンにタオルだけ。

そして足元に落ちている黒い本を拾う。

「やっぱり異世界なのか……………」

この本に書いてあった異世界へ行く方法。

興味本位で描いてみたらこんな事になってしまった。

ふと、誠治は疑問に思う。

何故自分はこんな事をしたのか？

あの円形の図、魔法陣のような物を描くのに4時間以上費やした。

誠治は漫画もライトノベルも読む。だからと言ってそれほど熱心な訳ではない。

異世界に行きたいと切に願う歳でもない。

なのに魔法陣を描いている時は止めようとは思わなかった。

「まあそんな事考えても仕方ないか。本当に異世界とは限らないし今の段階では此処が異世界とはまだ断定出来る要素がない。

ひよっとすると此処は地球の何処かである魔法陣は何か転移装置かも知れない。

それはそれで常識外だが。

誠治は取り敢えず歩き出す。

此処が地球にしる異世界にしるまず人と会う必要があった。

暫く歩くと人影が見える。

後ろ姿だが女性なのは解った。

腰まで届く赤いおさげ髪。服自体は何の変哲もない物だが何か革のような物で胸や脛辺りを覆っている。背中には槍を背負い腰のベルト部分に数本のナイフを差している。

「取り敢えず日本じゃなさそうだ」

あの格好は狩りをしていると推測出来るし日本ではまず捕まる。

「あのすんません」

誠治は極力声のトーンを抑え両手を上げながら声を掛ける。うっかりバツサリとやられては堪らない。

「誰!？」

返ってきた言葉は意外にも日本語だった。

女性は素早く反転すると槍を構え誠治を睨みつける。

「迷ってしまったんだ、近くの町か村の場所を教えてほしい」

「グルダの森で迷った？しかもそんな格好で？」

女性は怪訝そうにする。

それも当然で誠治の格好は近所のコンビニに行く程度の軽装だ。

「途中で荷物を盗まれてね」

誠治は適当な嘘をついた。

勿論本当の事は言える筈もない。

「……………ふん。怪しいけど悪い奴じゃなさそうね」

女性は構えを解く。

誠治を信用した訳ではないようだが争う気はないと判断したようだ。

「彼処へ行けばルサカへ着くわ」

右側を槍で示す。

「ん、どうも」

サッサと行けと言わんばかりの態度だがそんな事を気にしてもしょうがないので誠治は歩き出す。

「待った!!」

そんな時突然呼び止められる。

その声は切羽詰まったよう。

「何だ……………」

振り向き誠治は固まる。

其処に居たは熊だった。

だが普通の熊なら誠治は何度も狩っているので今更驚かない。しかし其処に居たのは全長5メートルを越え全身真っ赤な熊らしき生き物。上顎からは鋭い牙が1メートルは伸びている。少なくとも誠治はこんな生き物を知らない。

「まさかこんな所でコイツに遭遇するなんてね」
いつの間にか女性は誠治の隣まで来ていた。

「コイツは？」

「討伐ランクBのグルベアー」

「強いのか？」

「正直一人じゃ逃げるのもキツイわね」
女性の頬を伝って汗が落ちる。

「あなた闘える？」

「まあそこそこ」

清十郎には未だに勝てない誠治だが彼以外なら何とかする自負はある。

しかしあれがどれほど強さか解らない為任せるとまでは言えない。

「じゃあ同時に攻撃を仕掛けて相手が怯んだ隙に逃げるわよ」

「解った」

女性の提案を了承し誠治は腰を落とし構え呼吸を整える。

「良い？1、2、3…今！！」

合図と共にグルベアーに踏み込む誠治と踵を返し走り出す女性。

「って何処行く!?!」

「ゴメーン 一人じゃ無理だけど囷が居れば逃げれるから。じゃー
ねー」

ウインク一つし、あつと言つ間居なくなる女性。

「会ったばかりの相手を囷にすんじゃねえー!!」
誠治の絶叫が虚しく森中に響いた。

3話 異世界の実感

森の中を颯爽と駆ける女性。

「あの人には悪い事したわ」

そう言いつつ言葉に悪気が全く感じられない。

「ま、私は運が良くてあの人は運が悪かったってだけね」

たかが運されど運。

例えどんな強力な力を持った猛者でも当たり所が悪ければ死ぬし、病気もそう。

生き残る為に必要なのは運と言うのが女性の持論だ。

「まだまだ私はツイてるわね」

とても愉快そうに微笑んだ。

一方その頃来たくもない異世界に来て其処で初めて会った女性に囁にされた誠治はグルベアーと対峙していた。

「おかしいな…め〇ま〇テレビだと蟹座の運勢は2位だったんだが待てよ、するとアイツは蠍座か？」

そんな事を考えてながらグルベアーを観察する。

グルベアーは誠治を獲物と認識したようで涎を大量に垂らしている。

「旨くないぞあゝ」

「グルアア！！」

突如グルベアーが誠治に襲いかかってくる。

「速い！！」

素早く左へ交わし距離を取る。

「グルル……………」

グルベアーはイラついたように唸り誠治を睨みつける。

「成る程……」

誠治はグルベアーの能力の目安をつける。

知っている熊より動きは早い、大体だが1・5倍程。

「グルアアア！！」

雄叫びを上げ再び襲いかかってくるグルベアー。

四本脚で迫り前脚を振るう。

かなり余裕を持って避けた誠治だったが風圧で頬が浅く切れる。

「痛！！力も強いな」

傷から流れた血を指で拭い呟く。

誠治は何度も熊と相対してきた。

しかしこの妙な熊、グルベアーは比較にならない程強い。

「全力で行く」

誠治は呼吸を整え始める。

誠治が清十郎から教わってきた事の大半が基礎体力の向上と『氣』である。
漫画などで有名な氣だが実際にもある。とは言えそれを飛ばしたり空を飛んだり出来る訳ではない。
基礎能力の底上げが出来る程度で今の誠治では精々1・2倍向上させるので精一杯なのである。

誠治の身体が温かくなる。氣が全身を循環している証拠だ。

「よし!!」

グルベアーに向け駆け出す。

(何!?)

誠治は違和感を感じる。

異様に身体が軽いのだ。

感覚として1・2倍等ではなく軽く2倍以上ある。

しかし動きを止める訳にもいかない。

グルベアーまで一気に接近しジャンプする。狙いは眉間。

そこへ攻撃し怯ませる。

倒そうとは思っていない。逃げるまでの時間が稼げればいい。

氣を右手に集中させる。

「柔……波弾!!」

清十郎から教わった唯一の技。

『柔波弾』。

氣を用い波状の衝撃を相手に打ち込む。

外傷を与える技ではなく内、つまり内蔵にダメージを加える。

上手く行けばグルベアーは脳震とうを起こし暫くの間動けなくなる。

が、予想外の事が起こる。

パーン！！

攻撃は命中したのだがグルベアーは脳震とうを起こす所か頭部分が吹き飛んだ。

「は？」

啞然とする誠治を余所にグルベアーはユツクリと倒れピクリともしない。

(氣の威力が段違いに高い……………)

誠治は自分のした事に戸惑う。

こんな事は清十郎なら出来るかも知れないが誠治にはまだ無理な事。

「異世界……………だからか？」

それぐらいしか理由が思い浮かばない。

「まあ、今は」

誠治は頭の無いグルベアーに手を合わせる。

「済まんな」

運の無いグルベアーに誠治は謝った。

4話 女性に歳を聞くのは禁句です

「見えた」

ようやく森を抜けるとそれを確認出来た。

5メートルはある石材の壁。

近づくと入り口の門が見える。

恐らく彼処があの女性が言っていたルサカだろう。

中に入りたかったが誠治は自分の姿を改めて見る。

グルベアーとの闘いのせいで服は汚れ所々破けている。右手に黒い本、左手にグルベアーの牙二本。

此処が異世界だと確信した誠治はまず金の心配をした。

元の世界に戻るにしても直ぐには無理だろう、なら生き延びる為には金が必須。

あの女性がグルベアーの事を討伐ランクBと言っていたのを思い出したのだ。

某狩猟ゲームや異世界系小説にはギルドと呼ばれる組織が描かれている。そのギルドで討伐した動物の採取部位を売る事が出来ていた。

ならこのグルベアーの牙も売れるのではないかと判断したのだ。

が、いくら何でもこの格好は怪しすぎる。

門の両横には門兵らしき人がある。

誠治自身が門兵でも今の自分ではまず街の中には入れないし通行料がいるかも知れない。

「うーむ……」

「何してるの？」

「うわぁっと!?!」

さてどうするかと誠治が考えていると不意に背後から掛けられた声に飛び退く。

其処に居たのは女性、いや少女か。

黒髪を肩の辺りで切りそろえている。あどけない顔立ちは可愛らしく中学生位に見える。服装はフード付きの白いローブ。誠治の頭には某有名RPGの白魔導師思い浮かんだ。

「大袈裟じゃない？」

少女は呆れたように肩を竦めた。

「それに随分な格好ね、何かあったの？」

「え〜と、田舎から出て来たんですけど荷物を盗まれましたとどうしようかと悩んでいて」

言葉の内容自体はおかしくないが明らかに動揺してしまっていた。

これは疑われると相手の様子を伺うと、少女はガシッと誠治の両手を握り締める。

「大変だったね……」

「へ？」

「大丈夫よ!!何があったかなんてもう聞かないから……頑張って生きて行けば絶対良い事あるから!!」

少女は目を潤ませながら力説する。
どうやら少女の中で誠治は故郷を何らかの事情で追い出された可哀
想な身の上になっていようだ。

「ど、どうも…」

誠治は否定するの何だし、少女の迫力に押され頷くしかなかった。

(しかし何処の世界も良い奴と悪い奴もいるもんだ…)

この世界に来ていきなり囿にされたと思いきやこうして身も知らない男に心底同情している少女を見ると、どっちの世界もあまり変わらないと誠治は少し安心した。

「ありがとうな、えっと名前は？」

「あっ！？自己紹介もしてないのにゴメンね。私はルケア」
ルケアはニッコリと微笑み名前を言った。

「俺は山上 誠治。セイジだ、よろしく」

「うん！よろしくセイジ」

二人は笑い合つと握手をする。誠治の方が背が高い為屈んでだが。

「で、ルケアの保護者は何処だ？」

誠治は周りを見渡す。

ルケアのような少女が一人で居るにはこの森は危険だ。

なら保護者が居る筈だと探すのだがそれらしき者は見当たらない。

「私一人ですけど？」

「え！？ダメじゃないか一人なんて危ない！！」
何せさっきのグルベアーがいるような森だ誠治は大丈夫だったがこの少女が一人でどうか出来るとはとても思えない。

「……………私幾つに見えますか？」
若干ルケアの声が震えている。

「そつだな……………14、5歳かな？」

「……………24です」

「……………はい？」

「だから私は24歳なんです」
誠治は頭を傾げるが直ぐにうんうん頷きルケアの頭をポンポンと叩く。

「またまた、どう見ても14、5歳だぞ？本当は幾つなんだ？ひよつとしたら10歳とかか？まあ幼く見られたくないってのは解るがな」

「……………」
ルケアは無言のまま誠治から離れ背負っていたバッグから弓を取り出し構える。

「あの…ルケアさん？」
言いようのない殺気に誠治の背中に冷たい汗が流れる。

「私は歳の事だからかわれるのが一番許せないんです……………」

「ちょ！タンマ！？」

それから暫くの間誠治は降り注ぐ矢を死に物狂いに避け続けた。

5話 ギルド登録

「ここがルカサか」

誠治は目の前に広がる風景に感嘆とする。

石畳の道には馬車を通り、煉瓦造りの家々が連なる。通行人の髪は黒、赤、蒼、緑と鮮やかで耳が尖っていたり羽が生えていたり明らかに人間でないのも居る。

異世界。まさにその一言に尽きる。

「で、何時までむくれてるんです？」

「……………いいんです、どうせ私は見た目も中身も子供ですよー」

隣を歩くのはルケア。

ルケアの放った矢の雨を何とか避けきった誠治はルケアに謝り許して貰った。

ルサカの街に入る時に案の定門兵に変な目で見られた誠治だったがルケアがその門兵と知り合いだっいたらしく何事もなく済んだ。のだがまだルケアの機嫌は直っておらず頬を膨らませて黙っている。その姿が余計に子供っぽく見えるのだが勿論そんな事言えない。

「機嫌直してよルケア姉さん」

「え？」

「あ、いや俺より年上だから……」

軽率だったかと誠治は思ったがルケアは先程までの不機嫌顔から一転して笑顔になる。

「うふふ…姉さんか。そうよ私はお姉さんよ！さあ弟よ行くわよ！」
と、駆け足で先に行ってしまう。
その姿がまた子供っぽいのだが。

二人はある建物の前に居た。

誠治はルケアにグルベアーの牙を売る場所はあるかと尋ねるとやはりと言うかギルドはあり、其処で売ればいいという話になった。

そこで二人はギルドまで来ていた。

赤い煉瓦造りで三階建て。

ルケアによれば一階は仕事の依頼関係全般で二階はギルドへの登録や解除などの事務中心、三階は解らず関係者以外立ち入り禁止なのだそうだ。

グルベアーの牙を売るのは一階だが、先にギルドに登録してからの方が高く買い取ってくれるそうなので二人は二階に上がった。

人でごった返し騒がしかった一階に比べ二階は話し声がするだけで元の世界の役所を思い出させた。

「登録お願い出来ます？」

ルケアは受付らしき場所に座っている女性に話しかける。

「はい、あらルケア？」眼鏡を掛けた女性がルケアを見て少し驚いている。

「とつとつ冒険者止めるの?」

「や・め・な・い。くだらない事言っでないでこの子の登録をお願い」

ルケアに促され誠治は前に出る。

「へえ、やっと男が出来たのね」

「違うわよ!!」

そう言われたルケアは顔を真つ赤にし机に身を乗り出す。

「照れなくていいのよ。お姉さん安心したわ」

「あんた年下でしょうが!!」

「待たせてご免なさいね、手続きしましょうか」

喚くルケアを余所に数枚の紙を取り出し机の上に広げる。

「ナナあなたね!？」

「はいはい何時まで取り乱してんの。からかっただけよ」

「う〜…」

「子供じゃないってんなら年相応に落ち着いたら?」

「ふんだ!!セイジ終わったら一階に来なさいよ!!」

ルケアは言い返せないのかドストド歩きながら下へ降りて行った。

「で、あなた本当にルケアのいい人じゃないの？」

「違いますよ、今日会ったばかりですし」

「残念。男でも居ればあの子少しは大人っぽくなるだろうけどね」

「ルケア……さんと知り合いなんですか？」

「ええ、幼なじみよ。ちなみに私の方が一つ年下」と、軽くウインクする。

セイジも思わずドキッとするぐらい色っぽさ。

(まあルケアも怒りたくなるわな)
ルケアに同情する誠治だった。

「では改めて、私はギルド職員ナナ・クレパス。ようこそ我がギルドへ」

さっきまでのいたずらっ子のような顔つきとは打って変わりキリッとした表情は有能なキャリアウーマンのようだ。

「ご用件は登録でよろしいですか？」

「は、はい」

「ではこちらにご記入お願いします。名前以外は書いても書かなくてもよろしいので」

妙に迫力のあるナナに戸惑いながら差し出された紙を見る。

「あれ？」

「どうかなさいましたか？」

「あー…何でもありません」

そう言うものの誠治はその紙に書かれている文字に驚いていた。そこに書かれている文字は日本語だった。

何故？と誠治は混乱していた。

言葉通じるのは百歩譲ってまだいい。しかし文字まで日本語なのは流石に違和感しかない。

だからと言ってナナに何でこの文字なのかと聞く事は出来ない。

誠治は自分が異世界から来たのを出きるだけ隠しておきたかった。

頭がおかしいと言われるだけならまだいい。

この世界の常識や宗教がどうなっているか、解らないが下手をすれば異端とされ捕まり処刑されないととも言えない。

つまり現状では何も出来ないという事。

紙には書く欄が幾つかあったが名前だけ書く事にした。

何か言われるかと気が気でない誠治だったがナナは受け取った紙を見ても特にアクションはしなかった。恐らく何かしらの事情で書けない人達がいるのだろうと判断し安堵した。

「ではこのギルドの説明をさせて頂きます。まずランクがあり上からSS、S、A、B、C、D、Eの7段階あり受けれる待遇に違いがあり上のランクの依頼ほど高い報酬を得られます。尚、請けれる依頼は同ランクの物か下のランクのみとなります。ある程度数の依頼を達成されますとランク昇級試験が請けれます」

ナナは銀色の受け皿を取り出し、その上に指輪を置く。

「これがギルドに登録した証です。依頼を請ける時や達成の報告、素材の売却時には提示して下さい」

誠治はその指輪を取り観察する。

何かの金属製で色は黒。これと言った特色はない。

「今セイジ様はランクEなので色は黒ですが、ランクが上がる度に色が変わっていきます。後何かご質問は？」

「そうですね…無くすとどうなります？」

「紛失の場合は30万キユエルで新しい物をご用意します」

「なるほど」

と、言いつつ30万キユエルがどれほどの価値か分からない。

(まあそれはこれから知ってくしかないか)

「ありがとうございます」

誠治は指輪をポケットに突っ込むと立ち上がる。

「あ、それからこれは個人的なお願いなんだけど…」

「はい？」

「ルケアをお願い、あの子危なつかしくて」

「出来る事はしますよ」

ナナの心配顔に誠治は微笑んで答えた。

一階でルケアと合流した誠治はグルベアーの牙を売却した。
値段は二本で150万キユエル。
本来なら200万キユエルしてもいいのだが、ヒビが数ヶ所あるためにこの値段になった。

「いい無くしちゃ駄目よ？」

「分かってるって」
さっきからのルケアに誠治は苦笑いしている。
やはり150万キユエルは大金らしくルケアが心配しているのだ。
渡されたのは計6枚の硬貨。
500円玉程の大きさを銀色の円形硬貨が5枚。それより倍程の大きさを薄い金色の五角形硬貨が1枚。どうやら円形硬貨が1枚10万キユエルで五角形硬貨が1枚100万キユエルのように紙幣はないようだ。

「私は用事があるから一緒に行けないけど大丈夫？」

「何とかなるよ」

これから誠治はこのお金で冒険者の装備を整えるべく買い物に行くのだがルケアはどうしても外せない用事があるようだ。

「いい？終わったら私の所に来るのよ」

「分かったって」

「絶対よ！絶対来なさいよ！」

ルケアは何度も振り返りながら走っていった」

「やれやれ……」

そんなルケアを眺めながら誠治は溜め息を吐く。

この世界に来てまだ1日と経っていないのに色々な事があった。

勿論元の世界に帰るのが目的だが直ぐには無理。ならそれまでこの世界で生きて行かなくてはならない、もしかすると一生。

「まあ今はまだいいか……」

誠治は自分に言い聞かせるように呟く。

先の事は誰にも解らない。なら今を生きるしかないのだ。

「さてと」

誠治は街中へ歩き出した。

6話 パーティー結成

買い物を終えた誠治はルケアの居る宿屋に来ていた。

誠治の姿はすっかり変わっていた。

グレーの長袖長ズボンに革のブーツ、脛当て、胸当て。拳部分に金屬が付いている籠手。テント生地のようなもので出来たリュックを背負い中にはこの世界に来ることの切欠になった黒い本とマジックペンを入れている。そしてギルドの指輪は紐を通し首から下げている。

総額52万キュエル。その内防具一式が50万キュエルになる。

少々高いかと思つた誠治だったが、冒険者と言う命懸けの仕事をす以上装備をケチりたくはなかつたのだ。

そんな事で今の姿形だけで言えば冒険者として違和感はなかつた。

開けっ放しになっている入り口から中を覗き見る。

ルケアからは宿屋と聞いていたがテーブル席が幾つかありカウンターの棚には酒瓶が並んでいる。どうやら一階は酒場になっているようだ。

「それってクビって事!？」

店内中に響く大声に誠治はその方向を見やる。

其処には男女一組がテーブルに付いておりその中にルケアがいた。ルケアは怒りの表情で立ち上がりテーブルをバンバン叩いていた。

「そう取つて貰つても構わない。悪いがこれ以上君とパーティーは組めない」と皆が言っているのですね」

そんなルケアに冷ややかに言い放つ男。

4、50歳位で痩せているが眼光鋭い。例えれば鷹のよう。

「だからって……あっ!?!?」

その時ルケアと目が合う。

何故か誠治は不味いと思ひ逃げようとするが素早くルケアに腕を掴まれてしまう。

「セイジちょっと来て!!」

グイグイと引っ張られ隣に座らされる。

「えっと、ルケア姉さん俺にどうしろと?」

「弁護して」

「んな無茶な……」

(今日会った人の何を弁護しろと?)

「この方は?」

セイジがぼんやりとそんな事を考えていると男が話しかけてくる。

「えーセイジです。ルケアとは今日会ったばかりの知り合いです」

「ひょっとして冒険者ですか?」

「ええ、なりたてですが」

「そうですか。私は冒険者グループ『銀龍』の代表ガルド・ファレンと申します」

「セイジ・ヤマガミです。で、冒険者グループと言つのは?」

「冒険者グループと言つのはギルドに登録している冒険者らがお互

いを協力しあう集まりです」

ガルドはコップの水を一口飲む。

「依頼は様々な種類があり、またそれに対応する能力が必要になります。討伐系には戦闘力、採取系には知識等。しかし個人のパーティーは5人までと規定があるのでそれも限界があります。しかし冒険者グループに入っていれば依頼毎に必要な能力を持った冒険者達を派遣しより確実に依頼を完遂出来ます」

「へえ」

人材派遣会社みたいなものと誠治は解釈する。

『銀龍』のようなグループは幾つもあり冒険者の殆どが入っている必要不可欠な物。

「セイジさん、よろしければ『銀龍』に入りませんか？」

「お金は要ります？」

「ええ、最初に1万キユエルで依頼達成時に報酬から20%頂きます」

高いとも思えるが負担は減るしその分多く依頼を請けられる。その事を考えれば悪くない。

「ちょっと何勝手に勧誘してるのよ!!」

そんな考えをルケアの声が寸断する。

「私達は常に有能な冒険者を探していますから」

「セイジは冒険者になったばかりって言うたでしょう!!」

「落ち着いてルケア姉さん。それでガルドさん、さつきルケア姉さんがクビがどうやら言っていました。が何かあったんですか？」
このままでは話が全く進まないと判断しルケアを落ち着かせガルドに話を振る。

「ルケア様は『銀龍』に所属して居られるのですが他の冒険者方からの苦情が絶えないのです。例えば……」
ガルドは懐から紙を取り出す。

「『後方援護の弓で殺されそうになった』、『採取の際目的の物をずっと足で踏みつけていた』、『容姿の事を言われ暴れる』、『保存食を腐らす』等々……」

「ルケア姉さん全部本当の事？」

「……………てへ」

「敗訴です」

「そんなあっさり!?!」

「だって不味いだろこれ……」
冒険者は死と隣り合わせの危険な仕事で一つのミスが死へと繋がってしまう。

正直誠治でもルケアと組みたくない。

「我々も余り冒険者同士のいざこざに関わらないのですが流石にこの様な事が頻繁に起きては信用に関わるので」
ガルドも疲れたように言う。

「もういいわよー！そんなに辞めさせたいなら辞めてやるわよー！
そう言い放ち誠治の肩に手を置く。」

「セイジとパーティー組むからー！」

「……………はい？」

「了承して頂いて有難う御座います。ではこれで」

「ちょい待てよアンタ！？何ホツとして立ち去ろうとしてんだよ！
？」

事の重大さに気付いた誠治がそそくさと居なくなるうとするガルド
を呼び止める。

「セイジさん冒険者は生き残る事が第一です。生き残って下さい」
振り向き憐れみの籠もった目を言い、居なくなった。

「セイジー！今日から私達新生パーティーの始まりよー！」

「……………寝たい」

目を輝かせ宣言するルケアを余所に誠治は心身の共にグッタリとし
ていた。

閑話 兄を訪ねて…

誠治が深い眠りに着いた頃。

日本は夏の猛暑が悪あがきの如く猛威を振るっていた。

「此処にも居ない……」

此処海水浴を茫然と眺める一人の美少女、山上 飛鳥である。

異世界に行ってしまった誠治だがその事を知る由もない飛鳥は彼方此方を探していた。

海水浴場に来たのには理由があつた。

この夏、清十郎に連れ去られるまで誠治は大学の友人達と海に旅行する予定であつた。

飛鳥はその事を誠治から聞いていた、と言うよりその情報を清十郎へ流したのは飛鳥である。

誠治は清十郎には旅行を隠していたが飛鳥には普通に話していた。まさか妹から清十郎に情報が流れるとは思わなかつたのだ。飛鳥にしてみれば愛しき兄が他の女と旅行に行くなど許容出来るはずがなかつた。

そんなわけでまだ誠治が居なくなつて1日と経つて居ないため当初予定していた旅行先は流石に無いと判断し、ならばと海に来ていた。だが当然の如く誠治の姿は見えない。

「はあ……」

溜め息を吐き落胆する姿に見とれる男二人組。

「良いなあの子、声掛けようぜ」

「止めとけよ」

「んだよう」

「あの子の後ろ見て見るよ」

「後ろ? ……げっ!？」思わず青ざめる。

飛鳥の後ろには哀れなナンパ男の骸が山積みになっている。

死体ではありません。

「何だありや!？」

「あの子がやったんだよ」

幼い頃から誠治に付いて回っていた飛鳥も清十郎に鍛えられて来た。

何でもこなす飛鳥だが、武術に関しては天才だった。

14歳の頃に清十郎からお墨付きを貰った程である。(因みに誠治はまだ)

飛鳥を本気でどうにかしたければ5人以上の達人クラスを用意しなくてはならない。少なくとも軽薄ナンパ野郎がダース単位居ても何の役にもたたない。

「今度はお兄様がよく卑猥なDVDを買うお店を探しますか…」
飛鳥放浪の旅はこの後二週間続いた。

7話 魔法球

翌朝。

朝の日差しに起こされた誠治。

頭はボーとして体は怠い。

昨日は濃すぎる1日だったせいかまだ心身共に回復していない。

「起きるか…」

本当ならこのまま惰眠を貪っていたい誠治だがそんな暇はない。まだ100万キユエル弱のお金のあるうちに冒険者の仕事に慣れなくてはならない。

何せどの位か解らないがこの世界で生きていかなければならないから。

宿になつて二階から一階に降りルケアと合流。
朝食を食べながら今後の事を話し合う。

「まずギルドに行つて…あ、落ちた」

床に落ちたパンをサツと拾い上げ口に放り込む。

「……………」

「それで簡単な依頼を請けて…あー！！スープが袖に付いてる！？もうー！！」

ビシャビシャになった袖をギュツと絞り布で拭くルケア。

「……………」
そんな騒がしいルケアを見ていて誠治は一つ解った事がある。
ルケアは雑なのだ。

食べ物ポロポロと落とすはコップは倒すわでテーブル上は酷い有り様になっている。

雑であり不注意な性格。

その性格が冒険者グループ『銀龍』をクビになった根本の理由なのだろう。

流れとは言えパーティーを組んだ以上ルケアを見捨てる気はない誠治だが何とかその性格を直すようにこれから言うて行くつもりだ。

「ねえ聞いて…あつ」

ルケアの手からフォークがすっぽ抜け誠治の頬を掠める。

「ゴメンね〜」

「ははは…」

そう、何とかしなければ自分の命が危ないのだから。

「やつほー！！ナナ」

「そんな大声上げなくても聞こえるわよ」

朝食を終えた二人は早速ギルドに来ていた。

昨日喧嘩して別れたルケアとナナだが今は普通に話している。幼なじみの二人にしてみればあんなのは日常茶飯事であった。

「どうしたの？やけにテンション高いわね」

「私、セイジと組んだの！！」

「セイジ君とパーティー組むの？」

「ええ、セイジは初心者だからね。お姉さんが面倒見てあげないと胸（無い）を張り堂々と言いつつルケア。ナナはセイジを手招きし声を潜める。

（お願いはしたけどパーティーを組む必要は無いのよ？）

（俺もそのつもりはなかったんですが流れで…）

「ルケア、セイジ君に迷惑掛けちゃ駄目よ？」

「そんな事しないわよ」

何言ってるの？と言わんばかりのルケアにナナはこれ以上この事は言わない事にした。

機嫌を損なうと面倒なのは解っているからだ。

「そうそうセイジ君魔法球渡すの忘れてたわ」

そう言っつてテニスボール程のガラス玉のような物を3つ取り出す。

「何ですこれ？」

セイジはそれを手に取る。

よく見ると玉の中心が白く光っている。

「知らないのセイジ？じゃあ私が……………」

「ルケア、それ私の仕事だから」

「あはは、ついね」

「全く……………で、これは魔法球と言って魔法が入っている物なの」

「魔法！？魔法があるんですか！？」

「どうしたのそんなに驚いて？」

「セイジ？」

セイジの驚きようにナナとルケアがポカンとする。

（しまった！？）

セイジは自分の失態に動揺する。

余計な厄介事を避ける為には異世界から来た事は絶対隠さなければ
ならない。

魔法があると言うのはこの世界では常識なのだ。

その常識で驚くのは明らかにおかしい。

「あつと…自分の故郷はかなりの田舎でして」

「そう…まあ中々魔法を使える人は少ないから知らないのも無理な
いかもね」

「しょうがないわね。じゃあやっぱり私が説明……………」

「私がするからルケア」

「そう?」

事なきを得て誠治はホツとする。

ナナとルケアを信用しない訳ではないがどこから話が漏れるか解らない為用心するに越したことはない。

「魔法を行使するには魔力が必要で魔力は多かれ少なかれ誰でも持つてるの。でも魔力を火とか水とかの魔法として具現化出来る人は少ないの。魔法は便利で冒険者にとっては必要不可欠でも使える人は少ない、なら誰にでも使える道具があればいいと言う事で出来たのがこの魔法球なの」

「この中に魔法が…」

「そう、但し一回だけの使い切り。空になった魔法球は透明になるからギルドに持ってくれば魔法を充填できるわ」

「お金はどの位で?」

「これが一覧よ」

ナナから紙を受け取り見る。

回復(小)	2000キユエル
回復(中)	4000キユエル
回復(大)	6000キユエル
解毒(弱)	2000キユエル
解毒(強)	5000キユエル
鎮痛(弱)	1000キユエル

鎮痛（強） 4000キユエル

治癒 50万キユエル

開錠 10000キユエル

火球（小） 2万キユエル

火球（中） 5万キユエル

火球（大） 10万キユエル

水球（小） 5000キユエル

水球（中） 5万キユエル

水球（大） 10万キユエル 』

「治癒が抜けて高いですね」

「治癒は大抵の病気や怪我なら直ぐに治るから。回復は疲労を回復するだけだからこの値段。水球（小）は攻撃用じゃなくて飲み水用、大樽一個分の水が出るわ」

「なるほど」

「覚えていて欲しいのは開錠を犯罪に使ったらこれだから」と、ナナは首をトントンと叩く。

「勿論しません」

何事もないように言うナナに誠治は背筋を正す。

魔法球は強力で便利だけに犯罪での使用には罰則がかなり厳しい。逃げてモギルドが高額の懸賞金を掛けるので大概捕まる。ギルドの信用問題にも関わるからだ。

「この一覧以外の魔法もあるからその時は直接聞いてね」

「はい。でもそんな物を貰っても良いんですか？」

「それは支給品。中は回復（小）が2つと解毒（弱）が1つ。3つ以上欲しかったら販売もしてるわ」

「因みに1ついくらですか？」

「100万だけど誰にもって訳じゃなくてギルドが了承しないと売らないの」強力だけにお金だけで大量に所持されては困るからだ。

「そう言えばルケア姉さんは魔法球に何を入れてるの？」

「回復（小）回復（中）火球（中）ね」

「へえ…火球（中）を持つてるんだ？」

「これで魔物一掃したら気持ち良さそうだから」

「へ、へえ…」

赤い光を灯す魔法球を持ちブンブンと腕を振るルケアを見て顔をひきつらせる誠治だった。

グルダの森。

誠治とルケアはギルドで依頼を1つ請けた。

『バルバル草5束採取。』

報酬2000キユエル。

受諾可能ランクE。』

バルバル草は胃薬に使われる薬草。

森の中まで行かなくても採取出来るのでランクは一番下。受諾可能ランクは1人ならそのままパーティーの場合は過半数を締めるランクになる。

例えば5人の場合Bランク3人にCクラス2人ならBランクに。Aランク2人、Bランク2人、Dランク1人ならAランクとBランクが同数の場合低い方のBランクになる。

誠治はEランクでルケアはDランク。その為Eランクの依頼しか請けない。

「どう、あった？」

「これ？」

「うんそれ」

最低ランクの依頼だけに1時間も経たない内に5束を集め終わる。

懸念していたルケアの失敗は無く誠治は安心した所で思い出す。

「そう言えば魔法球ってどう使うの？」

使い方を聞き忘れていたのを忘れていた誠治。

「ああそれはね…」

ルケアは魔法球を1つ出し手に持つ。

「使用するって意志を持ってキーワードを言うの。それが引き金トリガーになるから」

「何でも良いの？」

「ええ、私は単純に『開け』って……」

その途端ルケアが持つ魔法球が赤く光り出す。

そしてバスケットボール大の火球が出現し誠治に向かって飛ぶ。

「うわあああー!!」

「……………あれ？」

悲鳴を上げ逃げ惑う誠治。

「解散します」

「お願い見捨てないでー!!」

暫くの間ルカサの街で包帯姿の男にすがりつく少女の姿が見られた。

8話 ランク昇級試験

誠治が冒険者になり一週間が経った。

初日こそ酷い目にあつた誠治だったが順調に依頼をこなして行った。

ルケアは最初の失敗をかなり反省したらしく以後大した失敗はしなくなっていた。

そんなある日、誠治とルケアはギルドでナナと話していた。

「ランク昇級試験？」

「ええ、そろそろ請けてみたら？」

ナナからの提案に誠治は首を傾げる。

「早くないですか？」

「そんな事無いわ」

もっと上のランクなら話は別だが現在誠治のランクは最低ランクのE。余程実力が共合わない以外一週間は決して短くない。

「解りました。で、内容は？」

「ランバード三匹の討伐、但し肉は傷つけないのが条件」

ランバードはグルダの森に生息する鳥型の魔物。鷹や鷲に似ており性格は温厚だが畑などの作物を食い荒らすので嫌われている。ただ肉は美味でルカサでは少し高級な料理に良く使われる。

「後、必ず1人でやる事。あなたの試験だから」

そう言うナナだがEからDの昇級試験程度で手伝いがあってもさほど言われる事は無い。上のランクだと失格になる場合もあるが。

「そう言えばルケア姉さんの時は上手くいった？」

「そ、そりゃあ勿論……」

「かなり手間取ったわよ」

「ちよつとナナ!？」

「ルケアの弓の腕はそこそこんだけど見付けるまでが大変でね、
「今日も居なかつたあゝ」ってよく私に泣きついてたわ」

「もうお止めてよ!」
顔を真っ赤にして飛びかかろうとするルケアに身長差を生かし軽くあしらうナナ。

「期限はあるんですか？」

「3日よ」

「うん、なら大丈夫だ」

「……………」
自信あり気な誠治に無言で睨むルケア。

「ね、姉さん？」

「簡単そんな依頼でも甘く見ちゃだめよ!……」

「自分は期限ギリギリだったから拗ねてるのよ」

「ちがーうー!!」

グルダの森。

誠治はジツと息を潜め獲物を見据えている。

一歩二歩とジリジリと近付く。

「クワアー!!」

異変に気づいたランバードが飛び立とうと翼を広げる。

ガシッ。

それを許さず誠治は両手で捕まえ首を捻る。

ランバードは断末魔を上げる隙も無く息絶える。

誠治はナイフで首を切り落とし逆さにして血抜きをする。

ランバードを捕まえるには大まかに2つ手段がある。

一つは弓や魔法球等で撃ち落とす。

それらの手段が無い場合は地上に降りた時を見計らい捕まえる。

ランバードの好物は鼠でそれを捕食する時に地上へ降りてくる。

ただ気配に敏感な為素手で捕まえるのは難しく大抵は罟を張るか網でとなる。

しかし誠治は森に入り三時間余りで既に二匹のランバードを捕らえていた。

誠治は気配を消す修行の一貫でよく雀や燕を捕まえさせられていた。雀等を素手で捕らえるのは想像以上に難しく、少しでも気配を悟られるとまず無理なのだ。

それを誠治は11歳の頃からやらされ、完璧に出来るようになったのは16歳だった。今の誠治なら容易い事と言えた。

「居た……」

運良く五メートル先で鼠を捕食しているランバードを見付ける。同じ要領で近付きあっさりと捕らえる事に成功する。

「こりや夕飯にはまだ早いな」
日はまだ高い。時計は無いが感覚的に3時頃だろうと誠治は推測する。

「ルケア姉さん驚くかな？」
出発前の時を思い出す。
付いて行くと言い張るルケアに困り誠治は帰ったら豪華な食事を奢るからと説得した。ゴネる子供は食べ物で釣るのが一番……そんな事はとても本人の前では言えないが。

「ぐはあ……」

突然背中に衝撃を受け吹き飛ばされる誠治。

肺の中の空気を吐き出された息苦しさを感じながら背後を見る。其処にいたのは鹿に似た生き物だった。

ただ大きさは誠治の知っている鹿より一回り大きく全身黒、角は絡

み合うようになっており一つの塊になっている。

ブラックディア。

グルダの森に生息する凶暴な鹿。

ブラックディアは目を真つ赤にし止めと言わんばかりに迫ってくる。

（ルケア姉にああ言われたのにな）

それは油断だった。

誠治は忘れていたのだ冒険者が死と隣り合わせの職業というのを。

（爺いに知れたらえらい事だな）

何故か今そんな事を考えてしまう。

清十郎の修行は厳しかったが特に怠けや油断などしようものならそれこそ死にそうな稽古をさせられていた。

（ああ…だからか…）

誠治は変に納得してしまう。

死なないために死にそうなる位修行をさせられたのかと。

ヒュンヒュン。

風を斬る音がしたと思いきやブラックディアの顔に矢が突き刺さり突進が止まる。

「え？」

「セイジー！！」

自分の名を呼ぶ声がすると其処には弓を構えているルケアの姿があった。

「グルラア!!」
ブラックディアが再び誠治に突進して来る。顔に矢は刺さっているが浅かった為一時止まっただけだった。

しかし誠治にはその僅かな時間だけで充分だった。呼吸を整え氣を全身に巡らせる。

ブラックディアが動く前に側まで移動し胴体に蹴りを入れる。

ズガアアン!!

ブラックディアは何本もの木をなぎ倒し吹き飛ばされ岩に激突すると動かなくなる。

「あたた…」

誠治は上体を軽く動かし怪我の状態を確かめる。多少痛むが骨折や内臓に異常はなかった。

「大丈夫!?!と云うより強いよねセイジ…」
実は誠治が戦う所を初めて見るルケア。
ブラックディアは討伐ランクC。此処グルダの森でグルベアと双壁を成す強力な魔物、それを一撃で倒した誠治にルケアは驚いていた。

「いや…ルケア姉さんのお蔭だよ」
謙遜ではなく本音だった。

あの時ルケアが弓でブラックディアを攻撃しなかったら、死にはしなかっただろうが恐らく大怪我をしていた。

「へへへ、まあパーティーだからね」

「でも来ちゃったんだ？」

「う、あの……やっぱり心配で……」
俯き、手をゴニョゴニョとこねくり回す姿に誠治は笑い出す。

「笑わなくていいじゃない……」

「ごめんごめん、さあ帰ろうか」

「うん、そうしょ！」

こうして2人はルサカの街に帰って行った。

セイジ・ヤマガミ。

ランク昇級試験合格。

Dランクに昇格。

9話 運がある者ない者

誠治がDランクに昇格し3日。

EランクとDランクからの違いは主に依頼の内容だ。

Eランクの依頼は採取と雑務のみでまずは依頼に慣れて貰う事から始まる。Dランクからは討伐系の依頼が出始め、危険度がぐっと上がる。

つまりDランクから本格的な冒険者と言えるのだ。

……なのだが。

「この依頼を頼みたいの」

ギルドへ来ていた誠治とルケアを呼び止めたナナは一枚の依頼書を渡してきた。

『五連草12束の採取。但し同じ根から4束づつ採取する事。』

報酬10万キュエル。

受諾可能ランクD。』

「これですか？」

「ええ、どうかしら」

誠治は依頼書を確認める。

採取系にしては報酬が高額だ。勿論採取系でも高額の依頼はあるが、それはもっと上のランクになる。

Dランクの採取系だと大体1万キュエル前後が殆ど。

10万キュエルは破格とも言える。

「何でこんなに報酬が高いんです？」
誠治は素直に聞いてみる。
依頼を請けて手に余るようでは困るからだ。

「この五連草が少し厄介だね」
この五連草は人参の葉に似ており滋養強壯薬の材料として用いられている。
その名の通り一つの根に五つ生えている。

「でも問題が採取時だね。五つの内一つだけの外れを引くと残りが枯れてしまうの」
外れを引くと残りは全て枯れる。最小で一束、最大で四束採取出来るのだ。

つまりこの依頼は外れを一度も引くなと 言うこと。

「何か見分ける方法はあるんですか？」

「外見では無理。一応『解析』の魔法球なら見分けられるけど、一回使ったら終わりだし50万キユエルするから割りに合わないの」

「何でギャンブル性の高い草なんだ…」

「でもこれはセイジ君じゃなくてルケアに頼みたいの」

「ルケア姉さんに」

「この子引きは強いのよ」

「まあね、お金の無い時はよくこれで稼いだから」

「え〜と俺は？」

そう誠治が言うとナナとルケアは顔を見合わせる。

「セイジ君はねえ…」

「運が無いから…」

「うつ！?…」

二人に言われ言葉に詰まる誠治。

確かに誠治は運が無いと言える。

分かり易いのはくじ運。宝くじや賭け事、福引き。これらの物に当たった事が一度もない。

この世界に来ても運の無さは変わらない。

誠治が果物を買つと甘くなく、飲み物を買おうと並ぶと寸前で売り切れ。

そんな所を何度もナナとルケアに目撃されそう判断されたのだった。

思えばこの世界に来て早々見知らぬ女性に囮にされ、油断したとは言えブラックディアに突き飛ばされ、そもそも望んでもいないのに異世界に来てしまっている現状。

しかし、

「俺がやる」

はいそうですかと引き下がる程誠治はオトナではなかった。

グルダの森に入り川辺の日陰を探す。

「あれよ」

ルケアが見つけ誠治が合流する。

全く同じ草が五つ直線に並んでいる。

「姉さん俺がやるから、いいね？」

「ま、まあ頑張って」

誠治の意気込みに若干引き気味のルケア。

「あつと言う間に終わらせるよ、くっくっくっ……」

誠治は危機迫る形相で五連草と対峙する。

確かに全く一緒に区別がつかない。

（こんな時は感性に任せる！！）

ジックリと五連草を見据える。

視覚ではなく感覚で見極めようと氣を巡らせる。

「これだー！！」

その中の一本を掴み勢いよく引き抜く。

（手応えあり！！）

確信を持つ誠治だったのだが……

ものの見事に残りの四本は枯れてしまった。

「ええ！！！」

「あゝあ」
シヨックに固まる誠治と予想出来てたのかりアクションの少ないルケア。

「今のは偶々だ！！次だ次！！」

それから計四回挑戦して全て一回目で外れを引いた誠治。

「こんな……こんな筈じゃ……」
すっかり意気消沈し体育座りでいじける誠治。

「気が済んだ？じゃあパツパツと済ますわよ」
やれやれと言った感じでルケアは五連草を探し見つける。

「じゃ抜くわよ」
さして考えず五本の内の一本を抜く。
残りの四本は枯れずそのまま残る。

「ホイホイホイっ」と
残り三本をアツサリ抜く。
一本も枯れず四本の採取に成功する。

「そんな簡単に……」
何の気負いもなくスンナリやってのけたルケアに唾然としようなだれ

る誠治だった。

残りもルケアが簡単に済ませ二人は帰路についていた。

「ルケア姉さんは運が強いのか？」

何とか立ち直った誠治がルケアに聞いてみる。

「うーん……そうね、実感は無いけど良い方だと思っよ？今まで仕事で怪我した事ないし」

「……………それって周りの運を吸い取ってるんじゃないか？」

「まさかあ」

ビチャツ。

笑い飛ばすルケアと頭に鳥の糞が掛かる誠治。

誠治は泣きなくなった。

閑話 兄を訪ねて2…

誠治が自らの運の無さにうなだれていた頃。

飛鳥は都内にあるDVDショップに来ていた。しかしそこはある一つのジャンルを扱う店舗であった。

飛鳥が店内に入ると客達は驚き下を向く。彼女のような美少女は此処ではかなり浮く。しかし飛鳥は何の躊躇も無く店内を見て回る。

「居ませんか……………」

飛鳥は落胆する。

この店は兄誠治が良く来る言わばお気に入り。それを知ったのは勿論本人からではなく誠治の部屋から出たゴミの中のレシートから。

ストーカーと言う無かれ、総ては誠治を慕う想いからの行動である。

本人の意思は無視だが。

ある棚で足を止め一枚のDVDを手取る。

『家庭教師のお姉さん〇イ〇リしてあげる』

ジッとそのDVDを見る。

「年上の何が良いんでしょうか……………」

兄誠治の部屋を物色し出て来たDVDを分析した結果誠治は『年上のお姉さん』好きと結論づけた飛鳥。

愕然とした飛鳥だったが直ぐそれらのDVDを処分しすべて『妹物』
と取り替えておいた。
飛鳥に抜かりは無い。

「はあ…お兄様なら何時でも私を好きにしても宜しいのに。こんな
物を見るのは腐れ童○だけです」

そう言い残し飛鳥が店内を出ると客達は誰ともなく商品を棚に戻し
て行った。

「次はご友人の所を訪ねますか…」
飛鳥の兄を探し求める旅はまだ終わらない。

10話 お人好しの冒険者

それはある昼下がり。

誠治とルケアは昼食を済ませギルドに向かっていた。

「姉さん気持ち悪くない？」

「何で？」

「いや大丈夫ならいいんだ」

こんな事を言うのは先程までの昼食の光景を思い出していたから。

この世界の食事は意外と美味しく、塩などの香辛料はさほど貴重と言うわけではない、そのため値段は安い。

よく見る異世界物では香辛料は貴重で味が薄いと言っていたので誠治には嬉しい誤算だった。

そんな訳でついつい食べ過ぎてしまう誠治なのだがルケアに比べれば大した事はなかった。

テーブルに積み上げられた料理の山。

小さな身体でそれを次々と平らげるルケア。 見ているだけで胸やけする程だった。

「セイジは意外と少食なのね、駄目よ男の子なんだからしっかり食べなきゃ。 冒険者は体が資本よ」

「体が資本ねえ……………」

「何か異論でも？」

「滅相もない！」

ジロリと睨むルケアに慌てて何でもないと首を振る誠治。相変わらず自分の容姿を言われるのを嫌うルケアである。

「きゃあ!!」

突然目の前に女性が倒れてくる。

「おっと!?!」

「え?え?」

辺りを警戒する誠治に何が起きたのか解らず戸惑うルケア。

「しつこいだよ!!」

その女性を恫喝する声の主を見る。

冒険者風の男達が4人居る。

どうやらその男達が女性を突き飛ばしたらしい。

「そんな安い報酬で出来るか!!」

そう言い放つと男達は居なくなる。

「何なのアイツら!!」

「大丈夫ですか?」

「はい、済みません」

女性は誠治が差し出した手を握り立ち上がる。

「アイツら冒険者でしょう!?ギルドに通報しましょう!!」

ギルドに登録している冒険者には様々な規定があるのだが、その中に一般の住民に危害を加えてはならないとある。

内容次第では厳しい処分が下る時もある。

「いえ……私が悪いんです」

「事情があるんですね？宜しければ聞かせて貰っても？」

「姉さん!？」

誠治はルケアを伴いその女性から離れる。

「まさか関わる気なのか!？」

「見捨てろって言うの?？」

「そうは言わないけど、わざわざ自分から関わらなくてもいいじゃないか」

「これも縁よ。さ、場所を移しましょ」

ルケアは渋る誠治を引っ張りその女性と一緒に歩き出す。

「どうぞ」

現在三人はその女性の家にいる。

女性はエルと名乗った。

栗色の長い髪に優しい表情。歳は前の経験から聞かなかった誠治だが大体16〜7歳位に見える。

ヒラヒラした空色のワンピースが似合っている。

「あっ美味しい」

「うん確かに」

誠治とルケアは出された飲み物を一口飲む。爽やかな香りが心地良い。

「それでどうしたんですか？」

「実はあの人達に採取の依頼を頼んだんです」

「ギルドを介してじゃなくて直接？」

「はい……」

基本的に冒険者に依頼を頼む時はギルドを介する。

そうしないと途中で依頼を放棄されたり報酬が支払われなかったりする場合がある。

「本当ならギルドに頼んだ方が良いのは解っているんです。でも報酬の額が用意出来なくて」

「因みに何を採取するんですか？」

「ゴールデングルです」

「それは……」

「姉さんゴールデングルって？」

「別名、魔力果実って言われる果物よ。万能薬の材料に使われる物で………確か一個200万キュエルはする」

「200万!?!」

勿論それだけする理由はある。

まず数が少なく実がある場所がグルダの森の奥地。

其処にはグルベアーが群れをなしており非常に危険でBランクに相当する依頼だ。

「払える報酬は30万キュエルで目一杯なんです。無茶は解っているんですが母を治すにはゴールドングルがどうしても必要なんです」

エルは奥の扉を見やる。恐らく其処には母親が居るのだろう。

「お母さん病気なの?」

「はい……衰弱が激しくて此処一週間が山なのです」と、エルは沈痛な表情を見せる。

「しかしなあ………」

確かに気の毒だと誠治は思う。

しかし同情だけでこの依頼は請けない。

冒険者は報酬を貰い依頼を遂行する。

言わば報酬は命の値段と言っている。

その報酬と命を天秤に掛け依頼を請けるかどうか判断する。

そしてエルの提示した報酬では天秤にすらならない。

非情でもこの依頼は請けるわけにはいかない。

「姉さん……」

そう判断した誠治はこの場を立ち去ろうと席を立つ。

ルケアは誠治の意図を察したのか頷き立ち上がる。

「エルさん私達に任せて!!」
察していなかった。

「おおい!？」

「ええ!？」

驚く誠治とエル。

驚く内容は違う。

誠治は「何言い出すんだコイツ」の驚き。

エルは「まさかこの依頼を請けて貰えるなんて」の驚き。

「必ずゴールデンゲルは私達が持つてくるわ!!絶対お母さんを直
しましょう!!」

「ありがとう!!ありがとうございますルケアさん!!」
エルとルケア2人の手を握り合う光景に誠治は頭を抱えた。

11話 餓犬

「馬鹿でしょあなた？」

「違うわよ馬鹿って言う人が馬鹿なのよ!!」

誠治は目の前で繰り広げられている子供の喧嘩に呆れながら眺めていた。

結局ゴールドリングルを採取する事になった誠治とルケア。

無論誠治はルケアに考え直すよう言い続けた。

しかし一向に聞く耳持たないルケアに誠治は諦めた。この様子だとルケア1人でも行つて仕舞いかねない。

流石にそれは拙いので誠治も無理矢理納得した。

だが依頼を請けたはいいがゴールドリングルのある場所が解らない為、ギルドに調べに来たのだ。

丁度ナナが居たため、ルケアが「ゴールドリングルって何処にあるの？」と聞いた所で冒頭の言葉に繋がる。

「馬鹿だ馬鹿だと思ってたけど真性の馬鹿だったのね」

事情を聞いたナナだったが更にルケアを責め立てる。

「見捨てるって言うの!？」

「そうよ」

「!？」

予想していなかった言葉に黙るルケア。

「困ってる人を助けるのは美德だけどいちいちそんな事してたら本
当に死ぬわよ」

「で、でも……」

「あなたが死んだら最低でも私とセイジ君が悲しむ。あなたはそれ
でもいいの？」

「……………」

ルケアは俯いたまま首を横に振る。

「なら今度からは必ず私に相談してね？」

「……………うん」

力無くしかし、しっかりと頷くルケア。
そんな光景を誠治は感心しながら見ていた。

最初は喧嘩をして、次に一転優しく諭す。流石は幼なじみだけの事
はあると。

ナナの方が年下なのだが。

「まあ請けたものはしょうがないわね」

「場所は解るんですか？」

「解らないわ。ゴールドングルの木の数は結構あるけど実際に実を
実らせるのは数十年に一個か二個って言われてるから」

「じゃあどうすれば……………」

「冒険者グループに案内役の派遣を頼んだら？ルケア、あなた『銀龍』に入ってたでしょう。あそこなら居る筈よ」

「えーと……………」

「何？」

「クビになったんだ姉さんは」

目を逸らすルケアを不審がるナナに誠治は溜め息混じりに言う。

「あなた馬鹿なの？」

「ううう……………」

肩を落とし道を歩くルケアと誠治。

あれからゴールデンダングルの案内役を派遣して貰う為にあちこちの冒険者グループを訪ねていた。

案内役を派遣して貰うにはまずその冒険者グループに登録しなければならぬ。

が、ことごとく拒否されていた。

原因はルケア。

先日冒険者グループ『銀龍』の登録を抹消されたルケア。

その理由は既に広がっており好んでそんな厄介な冒険者を抱える所は無かった。

2人は古ぼけた酒場に来ていた。

めぼしい所は全て周りこの場所が最後だった。

「此処に入るの？」

あからさまに嫌そうな顔になるルケア。

「仕方ないだろう？」

と言うものの誠治も乗り気がしない。

その酒場は見た目廃墟かと疑いたくなる程朽ちている。

ギイと軋む音をさせながら扉を開ける。

中は意外な程小綺麗で2人は内心ホツとするが、まだ陽は落ちていないのに薄暗い。

「客か？物好きもいるもんだな」

カウンターから声を掛けられる。

白髪白髭の痩せた男がグラスを拭きながら迎えた。

40代と言えばそうだし60代とも言われればそう見える。

「此処にゴールデンダングルの場所まで案内出来る冒険者は居ますか？」

「ほう、そつちの客か。尚更物好きだな」

男はグラスに液体を注ぐと2人の前に差し出す。

「ようこそ『餓犬』へ。私は代表のグラントだ」

冒険者グループの名称は現実に居る魔物の名を使う。

どの魔物の名を付けるかによってその冒険者グループの指針が解る。

『銀龍』は伝説の龍。神々しいその姿から別名『神龍』と呼ばれて

いる。

『餓犬』は誠治の世界で言えばハイエナのような存在。大して強く無いが狡猾で他の魔物から獲物を横取りしたりする。そんな魔物の名を使うこの『餓犬』は自虐的な集まりと言える。

「ゴールデングルか………居るには居る。だが高いぞ？」

「因みに幾ら？」

「200万キュエル」

「えー!!」

ゴールデングルの市場値は約200万キュエル。つまりそれを売ったとしても利益は出ない。勿論30万キュエルでは話にならない。

「それで構いません」

「セイジそんなお金…」

「あるにはある」

現在誠治とルケアの全財産は250万キュエル。ハッキリ言っただけなら厳しいが案内なしに比べれば仕方なしだ。

「では前金で50万キュエルだ」

誠治は懐から銀色の円形硬貨を五枚出し渡す。

「ふむ確かに、では早速会わせよう。サリュア仕事だ!!」

「うるさい!!聞こえてるよ!!」

女性の怒鳴り声が奥から聞こえてくる。

「全く……ゆっくり眠れやしない」

「文句言わずにサツサと出て来い」

女性が頭を掻きながら出てくる。

赤いおさげ髪。美人と言えば美人だが目つきの悪さでキツイ印象を受ける。

「お、お前は!!」

「どしたのセイジ？」

誠治はその女性、サリユアを見た瞬間叫んでしまう。

「何だい人の顔を見るなり失礼……」

サリユアは誠治を凝視し、止まる。

この異世界に来て初めて遭遇した人物であり、そして誠治をグルベアーの囿にした人物。

サリユアとの再会だった。

12話 ゴールデンゲル

翌日。

サリユア、ルケア、誠治の三人はゴールデンゲルを目指しゲルダの森を進んでいた。

先頭をサリユアが行き次にルケア、殿を誠治が務める。

行程は問題無く明日には目的地に着く予定だ。

「ここで野宿よ」

開けた場所に出るとサリユアはそう言って止まる。

「ふう〜疲れたあ〜」

「じゃあ薪を拾ってくるよ」

「よろしく〜」

両足を投げ出し、だらけるルケアを余所に誠治は二人から離れる。

思ってもいなかった再会をしたサリユアと誠治。

実はこの二人あれからまとも話していない。

サリユアは見捨てた罪悪感からの気まずさだが誠治は今更その事で何か言うつもりはなかった。しかしだからと言って気軽に話しかけも出来ないでいた。

もしルケアにあの時の事を知られば面倒な事になるのは目に見えている。

そんな訳で誠治はサリユアとは極力話さない事にした。

どの道この依頼が終わればサリユアと会う事は殆ど無いだろうと思っっている。

夜になりグルダの森は闇に包まれる。
地面がゴツゴツして寝れないと言っていたルケアは既に夢の中。
そんなルケアとは別にサリユアと誠治は焚き火を間に挟み気まずい
時を過ごしていた。

「恨んでる？」

不意にサリユアが話しかけてくる。

「うーん…正直よく解らん」

「何それ？」

誠治の言葉が理解出来ず首を傾げる。

「もし自分がアンタの立場だったらと考えてね」
誠治は焚き火に薪を放り込む。

「グルベアーを倒せない、逃げるのも困難。でも死ねない、死にた
くない。そう考えると……まあしょうがなかったのかなと」

「随分なお人好しね」

「違うよ、面倒が嫌なだけだ。なんなら此処でアンタに罵詈雑言吐
こうか？」

「遠慮しとく」

サリユアは肩を竦める。

誠治はよく周りから『人が良い』と言われる。

しかし誠治は違うと思っている。

清十郎という変わった身内はいるが誠治自身は平穩を望んでいる。面倒事は極力避け首を突っ込まないようにしている。困ってる人が居ても緊急性が無ければ無視するし、今回の依頼も請けるつもりもなかった。

では何故今此処いるのかと言うと、誠治が拒否しても『真性お人好し』のルケアは1人でも行ってしまふ。流石にほっとく訳にはいかなかった。

そう言う意味で言えば誠治もお人好しかも知れないが。

「所でゴールデンゲルはありそうなのか？」

「あなた運は良い方？」

「……………いや。だけどルケアは良い」

「じゃあ有るんじゃない？私も運が良いし。何せあのゲルベアーから逃げれたからね」

ニヤリとするサリユアに苦笑いでしか返せない誠治だった。

「次が最後よ」

翌朝。

再び歩き出した三人は昼前にゴールデンゲルがあると予想される場所に到着していた。

しかし其処には無く、他の場所にも移動したが結果は同じだった。次に行く場所がサリュアの知る最後で無ければそのまま帰還する事になっている。今までは運良く強力な魔物に遭遇していないものの、何時遭遇するか解らないからだ。

「あつ……」

最初に見つけたのはルケアだった。

「ふう、やっぱり運が良いわ私」
サリュアがホツとし呟く。

「あれがゴールデンゲル……」
誠治もそれに気づいた。

目線の先には枝に実った一つの果実。

形は林檎のようだが色がその名の通り黄金色だった。

光に反射し神々しいまでの存在感を示すその果実は明らかに普通の果実とは違っている。

「やったー!!」

ルケアは飛び跳ねんばかりに喜び走り出す。

「姉さん走ったら……」

転ぶぞ、といい掛けた時ルケアの身体が空に浮き吹き飛ばされたよ

うに誠治に向かい飛んでくる。

「姉さん!!」

突然の事だったが誠治は何かルケアを受け止める。

「姉さん!! 姉さん!!」

誠治が呼び掛けるが返事は無い。

ルケアの額からは血が流れグツタリとしている。

「薄汚い人間がそれに触れるでない」

誠治はその声の主を見やる。

20代位の青年。長い銀髪に赤い瞳。全身を黒いマントで覆っている。

「それは我が種族にこそ相応しい物だ」

青年は愉快そうに言い放った。

13話 ヤマガミ

その姿をサリユアは知っていた。

いや、正確に言えばその容姿を特長とした種族を知っていた。

「バンパイア…」

この世界の全人口7割は人と言う種族であり、残り3割が別の種族となる。

その種類は様々で数えればキリがないほど。

その中にバンパイアと言う種族がある。

人より優れた身体能力を持ち、大多数のバンパイアが魔法を行使出来る。

大昔に1人のバンパイアが万に近い人を惨殺した事もあった。

今はそんな事は無くあまり人と関わらなく見かける事は無い。

しかしその余りな強力な力な為恐れている人は多い。

そしてバンパイアには共通した外見的特長がる。一本一本金属の糸のような銀髪に血のような赤い瞳。

そう、目の前に居る青年のような。

「何のつもり!？」

サリユアは極力平静を装って話しかける。

「この娘がゴールドングルに触れようとしたからだ」

「それだけで？」

「これは貴様等のような種族が気安く触れていい物ではない。これは我ら気高きバンパイアに相応しい物だ」

「ゴールデンゲルは万能薬の材料でもあるが別名『魔力果実』とも言われ、浪費した魔力を回復出来る。」

「バンパイア等魔法を行使出来る種族からすれば食べるだけで魔力を回復出来るゴールデンゲルは彼等にとっても貴重な物なのだ。」

その事はサリユアも知っていた。

しかしバンパイアに遭遇するなど思いもしなかった。

グルダの森でバンパイアに遭遇したなどサリユアは聞いた事がなかった。

今回のこれは完全なイレギュラーであった。

「……………そう、解った。私達は諦めるから帰らせて貰うわ」

相手がバンパイアである以上戦うという選択肢はない。

逃げて背後から魔法を撃たれるのがオチ。

ならゴールデンゲルは諦め見逃して貰うのが一番の得策。

「ほう……………聞き分けが良いな。良からう、サッサと居なくなれ」

「ええ……………セイジ？」

サリユアは退こうと誠治を見る。

しかし誠治はグツタリとしているルケアを抱きかかえ動かない。

「何してるの行くわよー!!」

バンパイアの青年の考えが変わる前に此処を去りたいサリユアは苛ついた口調で言う。

「…………駄目だ」

誠治はそう呟きルケアをそっと地面に下ろす。ルケアの呼吸と脈はシッカリしており、額の傷もそう深くはない。

「何がよ？あなたまさかバンパイアと戦う気！？」

「爺が感情に支配されるなって言ってたけど…………駄目だ」
誠治はバンパイアの青年を静かに見据える。

「あなた馬鹿！？人がバンパイアと1対1で戦って勝てる訳ないでしょ！？相手が見逃すって言ってるんだからくだらない意地なんか張ってないで逃げるわよ！！」

「まさか俺に少年漫画の主人公みたいな心があるなんてな」誠治は気を失い眠るルケアを見る。

「姉がやられて弟が黙ってる訳にはいかないからな。おいアンタ！名前は何！？」

「名だと？まあよい我が名はジエスメリン・ダース」

「じゃジエスメリン、ぶっ飛ばすから」

「……………何？」

「ちよつと何言っただけ！？」

二人を無視し誠治は呼吸を整え気を全身に巡らせる。

この世界に来てから誠治は何度か気を試してみた。

どういう理屈かは解らないがこの世界で気を使うと元の世界の最大

約三倍の効果があった。

誠治は100メートルを12秒前後で走る。

バンパイアの青年、ジエスメリンとの距離はおよそ20メートル。

誠治はジエスメリンに向かい駆け出す。

「消え…!?!」

ジエスメリンは目を疑った。

目の前に居た人族の青年が消えたからだ。

いや正確に言えば消えたように見えたのだ。

「ぐはあっ!!」

腹部をとてつもない衝撃が襲いジエスメリンは吹き飛ばされる。木をなぎ倒し50メートルは飛ばされた所ようやく止まる。

「え?」

サリュアは目の前で起きた光景について行けず目を点にしている。

「き、貴様ああー!!」

ジエスメリンは立ち上がり空に向かい怒号する。

「意外と丈夫だな」

そんなジエスメリンの様子にも誠治は動じずサラッと立つ。

「許さん!!許さんぞ!!人の分際で我の身体を傷つけるとわ!!」

鬼の形相で誠治に手をかざす。

「死ねい!!『風よ』!!」

見えない風の刃が誠治を襲う。

しかしもう其処に誠治は居なかった。

「遅い」

不意に聞こえた誠治の声にジェスメリンは慌てて顔を向ける。

「ぐげえ!!」

グシャツとした音と共に横つ面を殴られたジェスメリンはそのまま地面と激突して動かなくなる。

「何が起こったの………?」

サリュアの目にはただジェスメリンが吹き飛んでいく事しか解らない。

とは言っても誠治のした事は単純な事。

相手が何かする前に殴る。

ただそれだけ。

最初の攻撃時に誠治はジェスメリンに接近したが20メートルあった距離を2秒と掛からなかった。二回目もジェスメリンが魔法を撃つ前に接近し殴っただけ。

誠治は清十郎から武術や武道等は一切習っておらず身体能力の鍛錬と氣の扱っただけを習った。

つまり氣で強化した身体能力でただ殴っただけなのだ。

魔法は確かに脅威だが撃つ前に倒してしまえばいいだけの話だった。

「さて、帰るか」

誠治はジェスメリンをもう見もせず、ゴールデンゲルをもぎ取りバツグに仕舞う。

「あなた強かったの?」

「多分な。ただ家の爺には勝てんがな」
この世界での氣の強化は凄いが、それでも清十郎に勝てる気がしない誠治だった。

「じゃああの時のグルベアー……」

「ああ倒したよ」

「言えば良かったじゃない倒せるって！？それなら逃げなかったのに」

「あの時は解らなかつたんだよ」

「でも……」

「しっ！……ちっ、囲まれてる」

まだ言い足りないサリュアを制し周りを伺う誠治。

さつきまで無かつた氣配が少なくとも10以上ある。

誠治はルケアを抱きかかえ辺りを警戒する。

するとサリュアと誠治を取り囲むように計15人が姿を現す。

その姿は皆銀髪に赤い瞳。

「う、嘘」

サリュアは絶望に氣を失いそうになる。

あのバンパイアが15人。その氣なら一つの国をも滅びす事が出来る程の人数。

「合図したら姉さんと一緒に逃げてくれ」
誠治はルケアをサリュアに預ける。

「あなたまさか……」

「他に策はあるか？」

誠治が囮となる二人を逃がす。

奇しくもサリユアと誠治が初めて会った時と似た状況。ただ今回のほうが格段に状況が悪い。

「……………解った」

「よし行くぞ。1、2、3……今だ!!」

「お待ち下さい」

と、一人のバンパイアが前に出てくる。

4〜50歳位の男性。

毅然とした雰囲気、執事のような印象を受ける。

「ヤマガミ様ですね」

「!?!……………何故知ってる？」

その言葉に誠治は動揺してしまう。

セイジの名ではなくヤマガミで呼ばれた事に。

ヤマガミを名乗ったのはルケアとギルドの登録した時だけだ。しかも此処は異世界、ヤマガミなんて性は恐らく無いからだ。

「我ら一族の者がヤマガミ様のお仲間を傷つけた事を深くお詫びいたします」

その男が頭を下げると他のバンパイア達も頭を下げる。

「一体……………」

分けが解らない誠治とサリユアはただ啞然とその光景を見ていた。

「我々はその者を回収しに来ただけですのでゴールドデングルはお持ちなつて結構ですのぞ」
それではと軽くお辞儀をした男は立ち去り15人のバンパイアとジエスメリンは居なくなつた。

「喜んでたねエルさん」

「ああ」

ルサカの街に戻つたルケアと誠治はゴールドデングルをエルに届けた。

エルは二人が恐縮する位涙ながらにお礼をした。

ルケアの頭には包帯が巻かれている。

気を失う寸前の時の事をルケアは覚えておらず誠治は木に頭をぶつけたと説明した。

本当の事を言う必要はないと誠治は判断した。

何故あのバンパイアは自分の姓であるヤマガミを知つていたのか？
しかも様付けで呼んでいた。
此処は異世界。自分は勿論家族が関わつているとはとても思えない。

「どうしたのセイジ？」

「ん、あーナナさんに怒られるなって。ほら姉さん怪我したから」

「あー！！そうだった…どうしよう…」

どんよりするルケアをセイジは慰めながらギルドへ向かった。

閑話 兄を訪ねて3…

「お待ちしておりました」

此処はとある喫茶店。

飛鳥はある三人に集まって貰っていた。

「あーすかちゃくん 相変わらず可愛いねえ」

軽薄そうな青年が手を振りながら飛鳥の隣に座る。

彼は笹川 信彦。

「ゴメンね遅れちゃった」

人懐っこい笑顔を浮かべ飛鳥の向かいに座る女性。

彼女は蛭名 京子。

「用事があるんだからさっさと済ませなさいよ」

機嫌悪そうに京子の隣に座る女性。

彼女は三宅 香。

皆が注文したのを見計らい飛鳥は話し始める。

「皆さんにお集まり頂いたのは他でもありません。実は兄の行方が解らないのです、心当たりはありませんか？」

「え？行方不明って事？大丈夫なのそれ？」

京子は初耳なのか驚いた様子。

「あの野郎、旅行の待ち合わせをすっぱかしたから文句言ってやる

うと電話しても出ないと思ったら……」
信彦は忌々しそうに携帯を見る。

「……………」
香は黙って飛鳥の話を聞いている。

「そうですか。私とお爺様以外の人と会った可能性があるのは皆さ
んだと思ったのですが……………」
飛鳥は落胆したのか深い溜め息を吐く。

実はこの三人、誠治と旅行に行く予定だった。
寸前で誠治が清十郎に攫われた為中止になったが。

「逃げたんじゃないあなたから？」

「……………意味が解らないのですが？」香の言葉に飛鳥は冷静を装いな
がら聞き返す。

「ゴメンね飛鳥ちゃん。最近、香寝不足らしいのよ」
慌ててフォローする京子。

「どこかの変態な妹に言い寄られて迷惑だったからじゃないの？」
しかし香は飛鳥を睨んだまま言い放つ。

「兄はそんな素振り見せませんでしたか？」
飛鳥は香の視線から目を離さない。

喫茶店内はピリピリとした空気になる。

実は飛鳥と香は過去何度も会っているのだが毎回このような雰囲気
になる。

兄を愛する飛鳥に誠治に好意を抱く香。
仲が悪いのは必然と言える。

「大体ブラコンなんて気持ち悪いのよ!!」

「あなたが気持ち悪がっても私には関係のない事です」

「あなたがどんなに誠治君の事を好きでも報われない!!誠治君は倫理観のしっかりした人だから!!」

「確かに。でも私には切り札があります」

飛鳥はニヤリと口元を歪ませる。

「私達は兄妹ですが血は繋がっていません」

「何ですって!!」

あまりのショックにテーブルを叩き立ち上がる香。

「そんな事此処で言って良いのかしら…」

止める事の出来ない京子はアイステイーを飲みながら呟く。

「まあまあ飛鳥ちゃん落ち着いて……」

「触らないで下さい」

肩に触れようとした信彦の手首を掴み一回転し捻る。

「肩がー!!肩がー!!」

ポコツと何か外れる音がしたあと信彦は肩を押さえ転げ回る。

「そんな訳ですので、私は手段を選ばずに必ず兄を陥落してみせま

す

「ぐぬぬぬ……」

「肩がー！！肩がー！！」

「アイステイー美味しいー」

勝ち誇る飛鳥に悔しがる香。未だ床を転げ回る信彦に我関せずの京子。

注意したい店員だがとばっちりを恐れ近寄れないでいた。

「だったら私が先に誠治君を見つけて保護するわ！！」

「やってみたら如何です？まあ無理でしょうけど」

「私が誠治君に真っ当な恋愛を教えて真っ当な道に戻す！！行くわよ京子！！」

「はいはい。その前に買い物付き合ってね」

勢い良く喫茶店を出て行く香に、引っ張られて行く京子。

「お兄様を見つけるのは私です……………」

飛鳥は決意に満ちた目をし席を立つ。

「肩が……………肩が……………」

残ったのは肩が外れた信彦とその対応に困り果てている店員だけだった。

14話 戦姫クリアベル

ゾクッ

「どうかしたセイジ？」

「何か寒気が…」

「風邪？」

「いや違うと思う多分…」

誠治とルケアは朝食の後、街を散策していた。

ルケアの怪我は大した事はないのだが念のため数日の間ギルドの依頼を請けない事にした。

良い機会なので薬や保存食の補充や装備の点検にあてる事となった。

「いつもより人が多くないか？」

店に装備を預けた誠治とルケアは街の大通りを歩いているのだが明らかに人が多く混雑してる。

「うん、何だろう？」

「あのねえ、あなた達冒険者なんだから情報ぐらい仕入れときなさい」

二人して首を傾げているといつの間にか居たナナが呆れたように言

ってくる。

「あっナナ」

「今日あの戦姫が来るのよ」

「戦姫ってあのクリアベル様！？スツゴイ！！何で！？何で！？」

「何でも魔物討伐の帰りとかでルサカに滞在するらしいのよ」

「間近で見たいなあ〜」

「有名……………何だよな？」

はしゃぐルケアを余所に誠治は聞いた事の無い名に首を傾げる。

「セイジあなたまさか知らないの？」

「えーと……………はい」

「あのファマル王国の第一王女にして戦姫と言われているクリアベル・ファルマーラーを知らないの！？」

「ぎ、残念ながら」

ルケアの勢いに若干引く誠治。

「全く……………何処の田舎から来たの？」

「あははは……………」

「まあいいわ。クリアベル様はあの英雄の血を引くお方なの!!」

「……………あの英雄？」

「そこから!？」

オーレム大陸には五つの王国がある。

ファマル、グラダナ、プリージュ、レスレイン、ザラ。

遙か昔からこの五つの王国はオーレム大陸の覇権を争っていた。

1000年程前からは表立った戦争は無いものの国交は断絶しており友好とは程遠いものだった。

そんな時50年前に異変が起こる。

魔物を従え王国を襲う存在。

名をココノツ。

その力は凄まじく五つの王国を蹂躪しオーレム大陸は誰もが終わりと絶望した。

突如として現れたココノツに絶望した民達は同じく突如として現れた英雄に希望を見いだす。

名をジユウセイ。

ジユウセイは協力を拒む五つの王国を説得し手を組ませ、それぞれ五つの王国の姫達を従者として引き連れココノツ討伐に挑む。

そして見事ココノツを倒したジユウセイは五人との姫との間に子を成した。

誰もがジユウセイがオーレム大陸の王になると信じていた。しかしジユウセイは姿を消した。大陸全土を搜索したもののジユウセイの行方は解らなかった。それからオーレム大陸ではジユウセイを英雄として讃え、五つの王国は積極的に国交をし友好的な関係を今も続けている。

「……………」と、これがこの大陸に語り継がれている『英雄譚』よ」

「へー」

三人は場所を食堂に移し話している。因みに誠治に説明していたのはナナ。結局ルケアは面倒になりナナに任せていた。

「本当に知らなかったの？オーレム大陸じゃ小さな子供でも知ってる話よ」

「うーん、当たり前過ぎて話すの忘れてたんじゃないかな？」

「呑気ねえ」

「まあな」

「ん？どうやら来たみたいよ」
食堂内が騒がしくなり人が次々と外へ出て行く。

「セイジほら行くわよ!？」

ルケアに突っつかれ通りに入る。
道の両端は人で溢れているが真ん中だけがポツカリと開いている。

「来たぞ!!」

「きゃー!!」

周りから歓声上がる。

やってきたのは馬に乗る鎧姿の人が10人。

一際歓声を浴びているのは先頭に行く女性。

光に煌めく金髪に宝石のような蒼い瞳。銀に輝く鎧に身を包むその姿はまさに神話の世界から飛び出してきた戦乙女。

「見えない……」

人の壁に阻まれガツクリとするルケア。

「しょうがない、ほら」

「え、きゃあ!」

見えるようにとルケアを肩車する誠治。

「子供じゃ……あっ!?!クリアベル様ー!!」

文句を言おうとしたルケアだったがクリアベルが視界に入った途端手を振り歓声を上げる。

「あれが英雄の血を引く姫様か……」

誠治はクリアベルを見ている。

容姿は抜群に綺麗だし美しい。

しかしそれ以上に誠治が感嘆したのはその存在感だった。

まるで彼女だけにスポットライトが当たっているように輝いて見える。

「強い…」

誠治はクリアベルの実力はかなりの物だと確信する。騎乗するその姿に隙はない。

武器は背中に背負う大剣なのだろう。本来彼女には似つかわしくない武器だが違和感はない。

「きゃあー！！クリアベル様と目が合ったあ！！」

「もう良いだろう姉さん？」

「まだまだほら追って！！」

「はいはい」

この後はしゃぐルケアに付き合わされた誠治だった。

「ふう、今日は良い一日だったわあ」

「俺は疲れたよ。姉さん見た目より重いんだな、肩が痛いよ」

「女性にそんな事言うんじゃない！！」

夕食を終えた後誠治とルケアは宿に向かっていった。

すっかり陽は落ちたが、歩く大通りはまだ賑わっている。

「やっぱりクリアベル様格好良かったなあ」
思い出しウツトリするルケア。

「姉さんてそつち系？」

「あのねえ……憧れよ憧れ。まあムサイ男より綺麗な女性の方がいいけど。あっセイジは大丈夫よ」

「へいへい」

「むー可愛げ無いわね。ここは顔を真っ赤にして照れてよ」

「次はそつするよ」

「もつ」

頬を膨らませ走り振り返る。

「セイジと会ってまだ14日なんだね。何か昔から一緒に居るみたい」

「色々あったからなあ……」

誠治がこの世界にきて二週間。

その日々の密度は元の世界とは比べ物にならない程濃くそして充実していた。

「これからも宜しくね」

「ああ、此方こそな」 お互い照れたように微笑み合う。

「そうだ、姉さん先に宿屋に戻つていてくれるか。忘れ物したみたいなんだ」

「何やってんの。解つたわ」

「早く戻つて来なさいよ」と言い残しルケアの姿は見えなくなる。

誠治は来た道を戻らず横道に入る。

すると賑わっていた大通りとは一転し其処は静寂が支配していた。暫く進み止まる。

「出て来たらどうだ？」

誠治は夕食後、ずっと後ろにある気配に気づいていた。

元の世界で動物を狩っていた誠治にはさほど難しい事ではなかった。

ルケアの方も知れないと思っていた誠治だったが気配はルケアではなく誠治に付いたままだった。

宿を知られるのは不味いと判断しこうして誘い込んだのだ。

「流石はヤマガミの者だな」

「な!？」

現れた人物に誠治は驚愕した。

服装は見覚えの無い蒼の上着にズボン。しかしその容姿と背中に背負う大剣には見覚えがあつた。

「ク…クリアベル…様？」

「そうだ」

クリアベルは大剣を背中から軽々と抜き誠治に剣先を突きつける。

「お前に聞きたい事がある」

クリアベルは獰猛な笑みを浮かべる。

「清十郎は何処に居る？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7713w/>

英雄の後始末

2011年10月28日13時15分発行